

## 訓練校訪問日記

### I. はじめに

これまでもずい分と全国の訓練校を訪ずれる機会にめぐまれ、それなりに訓練校のもつ悩みや訓練生の訓練校内外での生活については多少とも知っているつもりでしたが、今回訪づれた訓練校では、これまでとはまた別の事実におつかり勉強させられる点が多くありました。というといかにも訓練校の事情に精通しているかのような印象を与えますが、実はこれは私の認識不足をさらけ出したといったほうが適切であるのかもしれない。

ともあれ、このレポートでは今回の調査でとらえた事実を実感として報告することにします。

### II. 昼休みの一とき

二日目の調査の昼休み、校庭の一隅に数名の訓練生が遊んでいました。先ほど教室の中で知りあった顔でしたので、その仲間に入り話を聞いていますと、その中のA君が「二年生のS君の初任給は44,000円だよ、この分で行くと来年の俺たちは50,000円くらいになるかな」と冗談まじりに話しているのです。

特定地域の特定職種という条件づきではありますがS君のいう額は大卒の初任給と比べても決して低いものであるばかりでなく、従来の賃金の常識からいえばかなり高額なものであるといえます。

訓練生の関心の一つは賃金のことであるらしく「先生のサラリーはいくらですか」というきわめて素朴な質問を受けたのです。正直に答えてやると、彼等はなにか納得のいかない顔つきで、それでも自分達のサラリーの高いのに満足げに話をつづけるのでした。この会話は、これから社会に巣立とうとする訓練生の素朴な知識慾なのかもしれませんが、私がここで触れたいことは、彼らのサラリーについてではなく、そのあとにつづいたA君の言葉なのです。

「でも先生はホワイトカラーだからいいよ、俺たちは職工だもんね」。

私は正直なところ大きなショックを受けました。一瞬ギクッと身のひきし

まるのを覚えました。そして、そのあとA君がなにをいいたのか全てわかったような気がしたのです。

たしかにこれまでも、学校関係者や父兄との話し合いの中では同じような意味のことを聞かされております。しかし、その場合はこちらもそれ相当の心の準備をしていますので、さして動揺することもないのですが、精神的に無防備の状態で聞かされたA君の一言は名状しがたいショックでした。

「……職工だもんね」としか表現することを許さない社会に対する抗議なのか、職業訓練校にしか入れなかったという自嘲なのか、あるいはあきらめなのか、いづれにしても職業に対する、そして職業訓練に対する考えの甘さを指摘しないわけにはいかないが、そこには聞き流すことのできない、そして職業訓練が今後とりくむべき重要な問題を含んでいるのです。

「……職工だもんね」というA君の気持の中には、「職工」はホワイトカラーに比べて身分が低く、学力のないものがつくものであるという間違った考えがある。ホワイトカラーに対する強いあこがれがある。

私は彼らと話しているうちに、ふと「日本の下層社会の人びと」や「女工哀史」あるいは「職事情」の主人公と比べて、その意識のありようにどれほどの違いがあるのかと思うとともに、よきにつけ、悪しきにつけ歴史のもつ重みを感じないわけにはいきませんでした。

純粹な彼ら訓練生との雑談にすら心の準備をせねばならない現実は悲しいことです。たとえ、このように考えるものがA君1人であったとしても、やはり職業教育の理想からいえば悲しいものであるにちがいないと痛感したのです。

### Ⅲ. 個性的・情緒的欠陥

全国の訓練校を訪ねて気をつくことですが、どこの訓練校にいつても雰囲気がよく似ているのです。というよりも雰囲気がないといったほうが正確かもしれません。

もちろん、個々の訓練生や指導員の先生がたと話をすればその訓練校のもつ特色を理解することはできますが、しかし、それとて訓練校全体から発散する個性となるにはほど遠いものです。

つまり、訓練校からは売りものにする個性を感じることができないのです。四角いコンクリートの建物の中に訓練生がいて指導員がいる。そしてその両者によって技能や知識はつくり出されますが、なにかこのほかに欠けているものがあるように思はれるのです。それは一体なにであろうか、私は「個性」であるように思うのです。「個性」ということばが適切でないならば「精神」とおきかえてもよいと思います。

私自身のことをいえば高校時代の一時期、灰色とまではいかないまでも、それなりに受験勉強においかけられ、精神的にカサカサした状態で過したことを覚えています。それでも学校のもっていた個性（精神）にはいつもほこりを感じていましたし、それを守ろうともしていました。生徒全員がそう思っていたと思います。

ところが歴史の浅い訓練校とはいえ、それらしき雰囲気には接しえないのを个性的欠陥とってはいいすぎでしょうか。私はそれを残念に思うのです。

さて、どこにいても同じような雰囲気をもつ訓練校の多い中で、なんとか個性をつくりあげようと努力している訓練校を訪ねました。その校長は訓練校に特色を持たせ、この出身者なら安心して採用できる、安心して仕事をまかせられるという訓練生を、訓練校をつくりあげたいという大きな目標をもって運営にあたっておられます。

そのへんの事情はすでに訓大編集の「技能と技術」にも発表掲載されていますので、拙文をつらねることはさけますが、現訓練校に欠けているものへの挑戦をしておられる気迫がよくわかります。

私はこの訓練校を訪ねてこんなふうに感じました。技術革新下の技能労働者に創意と工夫が期待されており、そして彼らがベルトコンベアーというとまり木にとまる鳥になることを拒否しようとするならば、自からの手で自からを伸ばす基盤をつくりあげることが必要だということです。ただその場合にも、彼ら訓練生が創意と工夫を高めるあまり、合理性の追求のみに力を入れ、人間の心の中の情緒、それは一見無駄とみえる場合もありますが、それをわすれてはならないと思います。それはことばをかえていえば人間としての心のありかたです。いわば世の中をわたるためのじゆんかつ油です。

情緒のない人間がカサカサギンギン音をたてて世の中をわたるのを想像す

るのはなんとも殺伐としています。私はこの情緒というものも、やはり訓練校のもつ個性と無関係ではすまされないものだと思うのです。

外国の私立の有名校には、個人名を冠した学校が多くあると聞いています。そしてそこではかなり個性的な教育が施されていると聞いています。個性のない人間が無味であるように、個性のない組織というものも味気ないものです。また個性のない組織からは個性のある人間は決して生まれるものではありません。

かつて旧制高校から強烈な個性をもった人間が送り出された裏には、強烈な個性のある基盤があったからだと思います。

職業訓練が社会的に認められるようになるためには職業訓練校自体が売りものとなる個性をもつということも一つの要因ではないかと思うのです。

#### IV. 指導員と訓練生

この県はかつて石炭の出産県として広く全国に知られていましたが、いまは昔日のおもかげはなく、いくつかの炭鉱でほそほそと出炭しているにすぎないという産業背景をもつとともに、全国的にも大規模な同和関係者の多いという社会背景をもつ地域です。そしてこの二つの背景が職業訓練と密接な関係にあるのです。

まずB総高訓には約130名ほどの1年生が在籍していますが、彼らの大部分、ほぼ120名ほどがなんらかのかたちで現在も、あるいはかつて炭鉱に従事していた父兄をもち、残り10名ほどが農林関係者の子弟であるというほかに、いくつかの共通点があります。それは130名中の $\frac{1}{3}$ ほどが生活保護世帯であるということ、あるいは父親が失対受給者であったり、そうでない場合にも夫婦共かせぎ世帯であったりして、鍵っ子が多く、親の目が十分にゆきとどいていないという家庭環境です。

私はこの訓練校であることに気がつきました。それは、総高訓なり、専修訓なりを訪づれて、しばらくすると訓練生の間いくつかの異質のグループがあることに気がつきます。あるグループは出身校を中心としたグループであったり、居住区を中心としたグループであったり、あるいは遊びを中心としたグループであったりして、そのグループの特色を発散させるものです。

そしてそれが時には小生意気に、あるいは無邪気な印象を与えてくれるものです。調査の期間中、昼休みや放課後にそういうグループをみつけては駄弁るのは楽しいことですし、駄弁りの中からいろいろなニュースを得ることができるのです。

私はB総高訓でもこうしたグループに加わることを試みてみました。

しかし、めざすグループがみつからないのです。どこかにあるのだろうと思ってさがしてみましたがやはりみつかりません。長期の出張でカンがにぶったのかなと思いながら、それでも職業意識だけは働かせてみましたが、あるのはほぼ全訓練生が一团となったグループだけなのです。一体この訓練生のグループを構成する要素はなんであろうかと考えてみましたが、それはどうやら前に述べた生活環境にあるらしいのです。

つまり、訓練生には共通点が非常に多く、集団の準拠となるものが同じだということではないかと思ったのです。

父兄の職業も、居住区も、経済状態も、学歴も、性格も、いづれをとっても大きな差はありません。したがって、よしにつけ、あしきにつけ訓練生の言動には無意識のうちに社会的連帯意識が作用しているのだと思うのです。

ここではその問題をうんぬんするものではありません。ただ、彼らの社会的連帯意識があまりにも強く作用しすぎてアットホームになりすぎ、調査期間中、調査員を悩ませたことをつけ加えて本題に入りたいと思います。

さて、問題はこのアットホームになりすぎた彼ら訓練生ではなくて、ほかにありそうな気がするのです。

こんなことがありました。調査のとき、私の指示も聞こうとしないで好き好きなことばかりしている訓練生、勝手に調査票の中味をみている訓練生、席をたっている訓練生等、大きな声を出しそんなのをやっところえて我慢するのは忍耐のいることですが、つきそいの先生は日常菜飯事ですよといわんばかりに窓の外をみとられるのです。そうかと思うと、器具のテストのときには、元気のよい行動的な訓練生の頭を無言で“ゴツン”と……………・実感を卒直にレポートするとするならば、“放任”と“自主性”を、そして“ゴツン”と“きびしさ”を、訓練生も指導員もとりちがえているのではないだろうかと思ったほどです。

しかし、ここで訓練生を批判することはしません。  
たしかに、決してお行儀のよい訓練生とはいえませんが、それは元気で、活  
パツすぎるからだと善意に解釈しておきます。また同様に指導員を批判する  
こともできないと思います。なぜならば、いかに優れた技能を身につけた指  
導員でも、いかに広く深い知識をもった指導員でも、人間を扱うということ  
はまた別の要素を要求されるからです。いふなれば、一般に現在の訓練校の  
指導員にはこの点が欠けていると思うのです。

そしてこの要素が制度的に指導員に付与されていないとするならば、考え  
るべきは指導員養成のありかたであり、そのためのカリキュラムの編成の問  
題であるからです。

#### V. E 県の職業訓練の背景

一つの事実をつくりあげた歴史をひもとくと、その背景にはその時代の思  
想があり、文化があります。職業訓練法が制定された裏にもやはり当時のも  
ののみかたや考えかたが法の制定への足がかりとなっていることは明らかで  
す。そしてそのもののみかた、考えかたが社会生活に適合したときはじめて  
法の主旨は生かされます。実はこのことは今回の調査で感じたことの一つで  
あります。

といっても、私の感じたことはそれと逆に、職業訓練法の主旨を支える  
文化と、職業訓練の現実が別々の道をあゆんでいるという事実です。

全国的にも大規模な同和地区をもつ E 県では、職業訓練が同和地区の出身  
者と密接な関係にあります。E 県にはいま 8 つの専修校と 2 つの分校があり  
ますが、この分校のうち一校は同和出身者のために設立されたものであると  
いうことです。

そのときの状況はおおむね次のようなことであつたそうです。「われわれ  
同和地区の人間は、これまで幾年も不当な差別を受けてきた。このため、経  
済的にも恵まれず、社会的にも認められず、それがために苦しんできた。学  
力等に劣るのもそのためである。だからいまこそ同和地区出身者のための  
特別組織をつくって欲しいのだ」という要請のもとに訓練校が設立されたの  
だそうです。

こうしてつくられた訓練校には、いま単科30名定員に対し31名の訓練生が在籍し、訓練に励んでいます。また県下の他の専修校にも70名近くのものが入校しているということですが、この実数は実のところつかまえがたいものであるという説明でした。さらに同県では、職業訓練における同和対策の一環として、県内所在の自動車学校18校と委託契約を結び自動車運転員の訓練を実施しており、その入校状況は（昭和45年9月末現在）入校人員875名に対して、同和地区出身者が842名（96.2%）在籍しているということでした。

現在、職業訓練関係者は職業訓練をとうして質の高い技能者の養成、あるいは技能者の社会的地位の向上に努めており、より高い次元を求めてかつての職業訓練の遺産から脱皮しようとしています。そのような折、同県の職業訓練に接して感じたことは、その体臭がまことに時代がかかったものにつつまれたことです。

たしかにこの職業訓練を受けるものの立場からみるならば教育的効果は高いといえるのですが、それを企画する側、つまり行政的見地からながめますと社会政策的色彩の強い印象をまぬがれることはできないのでした。

私のみたこの県の職業訓練は、いわば古典的職業訓練ともいえるのでしようが、それがまたそれなりに依然として健在であり、しかも十分に効果をあげている現状をみますと、職業訓練というのはまことに複雑な要素をもったものであるといわざるをえません。

そして、従来の職業訓練から脱皮し、次元を高めようとしているものの努力がいかにもうつろにひびいたのは旅先の感傷からばかりではないように思えたのです。

## VI. おわりに

孫引きですが、歴史小説作家の司馬遼太郎氏が朝日新聞に「花神」を執筆するにあたって次のことを語っている。「山や川をみるには写真があるし、土地柄を知るには資料を調べればよいが、それだけでは小説は書けない。現地にゆくことによって、かたくなな精神に化学変化が起きる、その変化が自分の小説をささえる原動力だ」と。

私も今回の調査でいろいろな事実につかりました。

そしてそのいくつかはこれまでまったく考えてもみなかったことでした。司馬氏のいう化学変化は実は私の心の中にもおこりかけているのです。

しかし、私たちの化学変化は、事実をレポートにすることで終わったというものではありません。

今回の調査が今後の職業訓練の発展にどのような影響を与えるかにあります。そしてそれは、調査の結果を分析するものと、それを読む人びとの心のありようにかかっていると思います。